第２回福島支援　東京シンポジウム

長崎から福島へ　～世界は放射線リスクとどう向き合うか～

日時：平成 23 年 6 月 15 日（水）14：00～16：00
会場：青山ダイヤモンドホール「ダイヤモンドルーム」
主催：長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（ＮＡＳＨＩＭ）

（司会）

それでは時間になりましたので、ただいまより「東日本大震災復興支援第２回シンポジウム　長崎から福島へ～世界は放射線リスクとどう向き合うか～」を開会いたします。

私は、本日の司会を務めます長崎大学大学院医歯薬学総合研究科の高村でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに、主催者であります長崎・ヒバクシャ医療国際協力会ＮＡＳＨＩＭの副会長片峰茂長崎大学学長がご挨拶いたします。片峰副会長よろしくお願いいたします。

（片峰副会長）

皆さんこんにちは。長崎大学の片峰と申します。本日は主催者を代表いたしまして一言ご挨拶をさせていただきます。

３月１１日の東日本大震災以来、すでに３ヶ月がたってしまいました。しかしながら、復興に向けた動きは遅々としてなかなか進みません。加えまして、福島県の原発。炉の安定化もまだ見通しが全くたたないという状態でございます。被災地の皆様には、心からお見舞い申しあげたいと思いますし、現地で頑張っておられる方には、心からエールを送りたいと思います。とりわけ、原発の建屋の内外で復興に向けて頑張っておられる作業員の皆さんの安全を心から祈念したいというふうに思っております。

実はこの大震災、とりわけ長崎の人間にとりましては他人事ではなかったということでございます。震災の後の津波で無に帰した東北地方の海岸に面した町々の情景というのは、まさに６６年前、長崎市に出現しましたあの原子野の光景と全く二重写しになるものでございました。そして、なんと言いましても、福島原発の事故による周辺地域の放射能汚染でございます。

長崎、あの原爆の被災以来です。その被災の経験、さらにはそれからの復興の経験。そして、長崎大学を中心といたしました被爆者の医療。あるいは、放射線の健康影響に関する研究。こういった長年にわたります蓄積をなんとかこの福島県に役立てていただきたい。そういう思いでございました。その中で原発事故が長期化、あるいは深刻化するなかで、長崎大学、あるいは長崎県、あるいは医師会が集中して福島県に支援をしようということを決断いたしました。それ以降、医療関係者、あるいは行政担当者含めまして、述べ１００名以上の人間が福島にまいりまして、さまざまな活動に取り組んでございます。なかでも今日講演いただきます山下俊一教授を中心といたしましたメンバーですね。これまでの長崎原爆、あるいはチェルノブイリ原発事故の経験を活かして、福島の県民の放射線影響、それによる健康被害、これに対する正しい知識をなんとか県民の皆さまに持っていただきたいということも含めまして、福島県の県知事の直轄の危機管理アドバイザーとして、この間、活躍してまいったところでございます。

放射能の健康被害に関しては、様々な考え方がございます。それぞれの立場によりまして、それぞれの方、違う考えもあろうかと存じます。もちろん、非常にまだまだわかってない部分というのも多くございます。しかしながら、私たちは、私たち人類は、過去に広島と長崎の原爆、そして、チェルノブイリの原発事故という２つの極めて悲しい、しかも重大な経験を過去にしているわけです。その経験をこの福島に活かさない、そういう手はないだろうということでございます。そういった意味では、正しい知識に基づいて正しい危機管理やできるだけ適切な対応を、正しい知識に基づいてやるということが大事だのではないかというふうに考えております。そういった意味では、山下教授を始めとしたグループは福島におもむいて、福島の県民の問題意識に寄り添いながら、科学者として、あるいは専門家として、適切な科学的な発信をこれまでしていただいているものというふうに考えております。

この間の様々な報道の中で、私自身非常に衝撃を受けたことがございます。それは、福島県民であると、それだけの事実で。あるいは福島原発の近くに住んでいたと、それだけの事実でいろんな様々な方々が就職で差別される。あるいは、介護施設への入居を拒否される。そういった事実無根の差別がこの現代においても起こっているという事実でございます。まさに、これは長崎、広島の被爆者たちが過去に受けたいわれのない差別と全く同質のものでございます。まさにこの６０数年間、日本は世界唯一の被爆国と言いながら、やはりこの放射能に対するリスク、あるいは放射能とはなんなんだということに関して、この国の国民はまだまだ共有できてないということを感じました。そういった意味では、やはり正しい科学的な知識を日本の国民にもっと我々は発信していかなければならないということを感じますし、ましてや、それをベースに世界に向けて発信していきたいというふうに考えてございます。

また、本日は日本総研の会長でございます寺島実郎先生にも、お忙しい中来ていただきました。寺島先生が好んで使われる言葉に全体知という言葉がございます。今日はおそらく、その全体知という中からこの福島をどのように位置付けたらいいのか。あるいは今後のこの国のエネルギー対策がいかにあるべきか。そういったことも含めて、お話しいただけるのではないかというふうに思います。

本日はご参加の皆様と共に福島に思いをはせ、そして、これから何ができるのか、何をなすべきか。そういったことを共に考える機会にさせていただければ、被災者として喜びとするところでございます。

それでは、本日１日よろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。